

令和 3 年 5 月 13 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01725

研究課題名(和文)パラアスリートのスポーツキャリア発達における心理・社会的支援方略の構築

研究課題名(英文) Psychological and social problems in career development and transition among elite para-athletes

研究代表者

内田 若希 (UCHIDA, Wakaki)

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：30458111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：アスリートのキャリア発達やトランジションに関する研究は世界的に実施されているが、パラアスリートを対象とした研究成果の蓄積は、いまだ充分ではない。このことから、パラアスリートのキャリア発達やトランジションを検討し、障害に関連する要因とキャリアの関係性を明らかにすることは重要である。本研究では、受障時期を踏まえつつ、アスリートが経験したキャリアのプロセスを検討した。対象者が直面した課題や、どのようにそれらに対処したのかに焦点を当てながら、KJ法によって質的データを分析した。その結果、受障時期によって、スポーツの開始や継続において必要とされる支援が多様であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、教育的・社会的インクルージョンの視座に鑑みながら、パラアスリートのスポーツキャリア発達の全体像を捉えることを目指し、(1) 親の養育態度が障害のある子どもの運動・スポーツに対する態度に及ぼす影響、(2) わが国における教育(体育授業)場面における課題、(3) 「障害」の概念の捉え方に関する国際的な観点からの逸脱などを成果としてまとめた。これらの一連の成果は、教育的・社会的インクルージョンの国際的な観点からの逸脱が指摘されているわが国において、共生社会の実現やその成熟の促進に寄与するものであり、社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：Athletes' career development and transition research is conducted around the world, but the majority of studies investigate athletes without disabilities. It is important to examine career development and transition among para-athletes, and to clarify the relationship between factors related to disabilities and athletic career. The aim of this study was to examine the different processes experienced by para-athletes by timing of onset of disabilities. The qualitative data were analyzed using the KJ method, focusing on the problems the participants had experienced and how they had coped with them. The process required to start and continue a sport varied with the timing of onset of disabilities.

研究分野：アダブテッド・スポーツ科学

キーワード：パラスポーツ キャリアトランジション インクルージョン

1. 研究開始当初の背景

一般的に、アスリートはエリートレベルになるほど高い競技成績を求められ、ストレスフルな状況を経験するだけでなく、自分自身の日常生活との両立において心理・社会的課題と遭遇しやすい (Stambulova et al., 2012). このような心理・社会的課題は、アスリートのスポーツキャリアの発達を妨げる危機や停滞につながることもある (Wylleman & Reints, 2010).

従来のスポーツキャリア研究では、障害のないアスリートを対象に、ジュニア期からシニア期へのキャリア移行に伴う心理・社会的課題、競技引退と引退後の生活への適応、および競技を通じたライフスキル発達に関する知見が多くみられる (Ryba et al., 2015). しかしながら、パラアスリートに関する研究は未発達であり (Macdougall et al., 2015), 競技参加から引退後のセカンドキャリアまでを含めて、エビデンスの蓄積が急務である.

Stambulova (2009) は、スポーツシステムや文化的要素は、スポーツキャリア研究において重要な要素であると述べている. たとえば、教育的・社会的インクルージョンの成熟度は、障害者のスポーツ環境や教育・職業的環境に関連する重要な要素となり得る. この教育的・社会的インクルージョンの国際的な観点では、「障害」は社会との相互作用を通して構築されると捉えるが、わが国においては「障害」を個人の問題とみなす傾向にあり、国際的な観点からの逸脱が指摘されている (原田, 2016). 教育的・社会的インクルージョンの文化的要素に鑑みながら、パラアスリートのスポーツキャリア発達の全体像を捉えることは、パラアスリートへの支援方略の構築のみならず、わが国の文化的要素の成熟への寄与も期待できる.

2. 研究の目的

上記を踏まえ、本研究では、教育的・社会的インクルージョンの観点に基づくわが国の文化的要素を含めて、包括的にパラアスリートの抱える心理・社会的課題を検討し、その支援のあり方を提示することを目的とした.

3. 研究の方法

エリートパラアスリートを対象に、インタビュー調査を実施した. 事前に、所属する大学の倫理委員会による審査を受け、承認を得てから実施された. 対象者のサンプリングに際しては、パラリンピックもしくは世界選手権への出場経験があること、自身のスポーツキャリアを通して得た経験について、語る意志があること等の条件を満たす対象者を抽出する合目的サンプリングを用いた. ただし、1名のみスノーボールサンプリングにより抽出された.

調査は、半構造化インタビューによって実施された. IC レコーダに録音されたインタビューデータから、逐語録を作成した. インタビューは、スポーツキャリア全体を通して経験した心理・社会的課題に関する15個のインタビューガイドに基づいて実施された. 得られた質的データは、KJ法を用いて分析を行った. なお、信用性の担保は、Roller & Larvakas (2015, 2018) の Total Quality Framework (TQF) に準拠した.

4. 研究成果

本研究では、競技開始から競技引退までを含むスポーツキャリア全体に対して、パラアスリートの経験や考えに関するインタビュー調査を実施したが、ここでは主に、競技開始期に焦点を絞って成果をまとめることとする. その理由は、パラアスリートは受障時期によってその競技開始に至る過程はさまざまであり、対象者に非常に特化した意義ある成果を得ることができたためである.

(1) 先天性障害および幼少期に受障したアスリートにおける心理・社会的課題

数名の対象者が、障害のある子どもたちに対して、スポーツキャリア発達の初期段階で、能力への気づきを深める機会の提供が重要であると述べた. また、子どもの能力に焦点を当てるだけでなく、障害を子どもたちの特性の一つとして認識している親の存在は、子どもたちの運動・スポーツに対する態度にポジティブな影響を及ぼすことが明らかになった. このような親の影響を受けた子どもたちは、スポーツに熱心に取り組み、継続する傾向にあった. 一方、子どもたちの障害に焦点を当て、子どもを家の中で過ごさせる傾向のある親は、子どもたちの身体活動に対する態度にネガティブな影響を及ぼしていた.

体験会などによってスポーツに参加する機会は、身体活動やスポーツに対してネガティブな感情を抱いている子どもたちに、成功体験を積む機会となることが示唆された. 子どもたちは、身体的なスキルの可能性に気づき、結果として、楽しさやポジティブな心理的效果を実感することにつながっていた. この経験が、子どもたちのスポーツ継続に関連していた.

また、数名の対象者は、実施可能なスポーツに関する知識の欠如や、必要な環境や用具を整えるための支援不足、および学校の教員の理解不足などを懸念していた. これらのネガティブな要因は、子どもたちのスポーツ継続を妨げる可能性が示唆された.

さらに、1名のアスリートは、障害のある青少年に対して、スポーツを通して自信を高めるような支援をすることは、差別に対して立ち向かうことにもつながると述べた. これは、スポーツを開始することの価値の一つといえよう.

(2) 中途身体障害を受障したアスリートにおける心理・社会的課題

事故や病気などに伴う中途身体障害は、身体的な機能や能力の喪失をもたらすものである (Uchida & Hashimoto, 2017)。中途身体障害を受障した対象者は、競技開始前は、希死念慮、悲嘆、自己否定、および喪失感を抱いていたと述べた。中途身体障害を負うことにより、自分自身の能力 (ability) ではなく、障害 (disability) に焦点を当てるようになり、自身が置かれている状況の受容が困難になることが明らかになった。

数名の対象者は、競技の開始に際し、重要な役割を果たした人々の存在に言及した。また、テレビや雑誌などからパラスポーツに関する情報を収集したことで、競技開始に至った対象者も存在した。特に、エリートレベルのパラアスリートの成功体験を目の当たりにし、身体能力の可能性に気づききっかけとなっていた。

そして、競技開始後には、中途身体障害のある者にとって、パラスポーツは重要な意味を持つようになる。なぜなら、パラスポーツが、彼らの日常や人生に、新たな意味をもたらすからである。数名の対象者が、パラスポーツは、挑戦する気持ち、楽しさ、生きようとする熱意、および目標や夢を提供するものであると語った。加えて、受障後に揺らいだ自己概念の再構築、より幅広い視野、そして社会的な居場所がある感覚をもたらす役割を担っていることが示唆された。

しかしながら、中途身体障害のあるアスリートにおいては、いくつかの特有な課題が認められた。例えば、受障前にスポーツキャリアをすでに形成している場合、パラスポーツのレベルを低く評価する傾向にあり、パラスポーツに対する適切な認識の形成を妨げることがあることも示された。

(3) 考察および今後の展望

ここでは特に、受障時期というパラスポーツ特有の要因や、わが国における教育的・社会的インクルージョンの状況などを踏まえながら、考察していくこととする。

まず、幼少期に競技を開始する際には、親の障害に対する態度が、スポーツや身体活動に対する子どもたちの態度における重要な要因となることが明らかになった。特に、子どもたちの障害に焦点を当て、子どもを家の中で過ごさせる傾向のある親は、子どもたちのスポーツや身体活動に対する態度にネガティブな影響を及ぼすことが明らかになった。原田 (2016) は、国際的な観点では、「障害」は社会との相互作用を通して構築されると捉えるが、わが国においては「障害」を個人の問題とみなす傾向にあり、国際的な観点からの逸脱を指摘している。社会モデルにおける障害の概念を見ると、「障害とは、社会的に構築された現象」と端的にまとめられている (Retief & Lets'osa, 2018)。しかし、わが国においては、偏見や差別、スティグマが今なお残っており、社会モデルに依拠する障害の概念が社会に十分に浸透していない (原田, 2016)。このような要因が、親が障害をネガティブに捉えることを引き起こす可能性がある。わが国は、真の社会参加に向けて、様々な形の差別や排除、バリアを取り除くための一歩を踏み出してはいる (Ree, 2015)。しかしながら、本研究の成果から、障害のある子どもの親を勇気づけるような社会的インクルージョンの更なる強化が、今なお必要であると言えよう。

また、本研究の結果から、スポーツや身体活動に対してネガティブな態度を有する子どもたちのスポーツ開始やその継続においては、他のアスリートやコーチからの言語的説得、エリートレベルのアスリートのロールモデルとしての活用、ささやかな成功体験や身体的側面の変化への気づきの向上などのように、スポーツを行う環境づくりが重要となることが明らかになった。一方、わが国においては、障害のある子どもたちがスポーツに参加するために、十分な機会や用具の整備がまだ不十分である。これらの要因は、障害のある子どもたちがスポーツを開始・継続することを妨げるものであり、障害のある子どもたちのための環境づくりは喫緊の課題である。

加えて、Válková (2017) は、初期の内発的動機づけに基づく行動の発達には、将来的なスポーツの継続にポジティブな影響力を持つことを示している。また、体育授業において、障害のある生徒が満足な経験を得ることを保証するために、教員に対する適切なトレーニングの必要性も指摘されている (Sato, Hodge, Murata & Maeda, 2007)。これらのことを踏まえれば、障害のある子どもたちがスポーツに参加・継続するために、体育授業の環境づくりも必要であろう。

途中で障害を負ったアスリートにおいては、受障体験によって、生活や社会的地位の急激な変化を経験している。先行研究において、中途身体障害者は、ネガティブな身体的・社会的自己知覚の形成、身体的不満足感の増加、および障害への焦点化など、多くの心理・社会的な課題に直面することが示されてきた (Blinde & McClung, 1997; Sherrill, 1997; Uchida & Hashimoto, 2017)。一方、本研究の成果では、パラアスリートの人生において、パラスポーツが重要な意味を持つことが明らかになった。パラスポーツの開始は、スポーツキャリアの開始という意味だけではなく、喪失後の人生を再構築し、新しい世界観を形成することの開始でもある。パラスポーツは、自己変容のプロセスにおいて意義を持つものであり、スポーツを通して自己概念の再構築を促す支援が必要であろう。

ただし、受障前にスポーツキャリアを有する場合、パラスポーツのレベルを低く評価する傾向にあり、パラスポーツに対する適切な認識の形成を妨げる可能性があることに留意する必要があるだろう。内田 (2017) は、わが国においては、障害者と健常者を二元論的に捉えたり、障害者は身体的な能力が低いと考える傾向にあると指摘している。つまり、パラアスリートであって

も、自身が障害を負う前は、同様の信念を有していた可能性がある。このことから、教育的・社会的インクルージョンの国際的な観点に基づいて、障害とは何かを理解するための教育プログラムの確立が、わが国において必要であろう。

最後に、今後の展望として、競技引退後に重要な役割を担う可能性のあるデュアル・キャリアの発達の支援について述べる。エリートレベルの競技環境に身を投じている熟練期において、教育的・職業的トレーニングを受ける機会を充実させることは困難を伴う。しかし、スポーツキャリアはアスリートの人生における一期間でしかなく、競技引退後もアスリートの人生は続いていく。わが国においては、オリンピック代表などのような障害のないアスリートに対しては、デュアル・キャリア形成のためのプログラムが提供されてきた (Ito & Ogasawara, 2018) が、パラアスリートに対しては支援がなされていない現状にある。よって、パラアスリートが競技引退後の人生を充実したものにするために必要なスキルや資格を獲得するために、適切なデュアルキャリアの形成を促進する支援の検討が、今後望まれる。

(4) 引用文献

- Blinde, E. M., & McClung, L. R. (1997): Enhancing the physical and social self through recreational activity: Accounts of individuals with physical disabilities. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 14: 327-344. doi: 10.1123/apaq.14.4.327
- 原田琢也. (2016): 日本のインクルーシブ教育システムは包摂的 (インクルーシブ) か?: サラマンカ宣言との比較を通して. *法政論叢*, 52: 73-85.
- Ito, M., & Ogasawara, E. (2015): Research on supporting dual career for Japanese Paralympians. *Juntendo Medical Journal*, 64 (Suppl 1): 33. doi: 10.14789/jmj.2018.64.JMJ18-P14
- Macdougall, H., O'Halloran, P., Shields, N., & Sherry, E. (2015): Comparing the well-being of Para and Olympic sport athletes: A systematic review. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 32: 256-276. doi: 10.1123/APAQ.2014-0168
- Ree, S. (2015) Inclusive education in Japan and Australia: A comparative legislative and policy analysis. *Bulletin of Den-en Chofu University*, 10: 51-68.
- Retief, M., & Letsosa, R. (2018): Models of disability: A brief overview. *HTS Teologiese Studies/ Theological Studies*, 74: 1-8. doi: 10.4102/hts.v74i1.4738
- Roller, M. R. & Larvakas, P. J. (2015): *Applied qualitative research design: A total quality framework approach*. NY: Guilford Press.
- Roller, M. R. & Larvakas, P. J. (2018): A total quality framework approach to sharing qualitative research data: comment on DuBois et al. (2018). *Qualitative Psychology*, 5: 394-401. doi: 10.1037/qap0000081
- Ryba, T. V., Ronkainen, N. J., & Selänne, H. (2015): Elite athletic career as a context for life design. *Journal of Vocational Behavior*, 88: 47-55. doi: 10.1016/j.jvb.2015.02.002
- Sato, T., Hodge, S. R., Murata, N. M., & Maeda, J. K., (2007): Japanese physical education teachers' beliefs about teaching students with disabilities. *Sport, Education and Society*, 12: 211-230. doi: 10.1080/13573320701287536
- Sherrill, C. (1997): Disability identity and involvement in sport and exercise. In K. R. Fox (ed.), *The physical self: From motivation to well-being* (pp. 257-286). Illinois: Human Kinetics.
- Stambulova, N., Alfermann, D., Statler, T., Coˆteˆ, J. (2009): ISSP position stand: Career development and transition of athletes. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 7: 395-412. doi: 10.1080/1612197X.2009.9671916
- Stambulova, N., Franck, A., & Weibull, F. (2012): Assessment of the transition from junior-to-senior sports in Swedish athletes. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 10: 79-95. doi: 10.1080/1612197X.2012.645136
- 内田若希 (2017): *自己の可能性を拓く心理学*. 東京: 金子書房
- Uchida, W., & Hashimoto, K. (2017): Dramatic experiences in sport and psychological well-being in elite athletes with acquired physical disability. *Journal of Health Science*, 39: 71-78.
- Váľková, H. (2017): A theory of transition in sports career. *Studia Sportiva*, 11: 210-215. doi: 10.5817/StS2017-1-38
- Wylleman, P., & Reints, A. (2010): A lifespan perspective on the career of talented and elite athletes: Perspectives on high-intensity sports. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 20: 88-94. doi: 10.1111/j.1600-0838.2010.01194.x

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 内田若希
2. 発表標題 中途障害に伴う自己の喪失と再構築のストーリー パラアスリートの語りから
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Wakaki Uchida and Hiroi Fukaya
2. 発表標題 Psychological and social problems in initiation and development stage of career development among elite Japanese para-athletes
3. 学会等名 IPC 's VISTA Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 内田若希	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 264
3. 書名 障がいのある人のスポーツ指導教本（初級・中級）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------